

2018 年度卒業式 学長式辞

今朝、創立 70 周年記念フラッグがはためく埼玉大学構内は、咲き誇れる日々も間近な桜のつぼみが膨らみ、その多くが美しくほころんで、みなさんの門出を祝福しているかのようでした。このように春の装いが進み、希望に満ち溢れた今日の良き日、ここに埼玉大学卒業式を迎えられた 1,569 名のみなさん、卒業おめでとうございます。学長として、心からお祝い申し上げます。また、ご家族のみなさまにも、深く敬意と祝意を表します。

埼玉大学は 1949 年に開学、今年、創立 70 周年を迎えました。旧制浦和高校を母体とする文理学部と埼玉師範学校を母体とする教育学部の 2 学部・2 キャンパス、入学定員 1,200 人でのスタートです。爾来 70 年の歴史を辿り、いくつもの節点や分岐点が繋がった埼玉大学の時間軸は、紆余曲折に今に至ります。現在は教養、経済、教育、理、工の 5 学部と、それにつながる大学院の人文社会科学、教育学、理工学の 3 研究科からなり、入学定員は 2,157 人にまで増えました。そして、これまでの卒業生は、皆さんを含め、86,537 人に及びます。

埼玉大学の全てが集まる今の久保キャンパスには 50 年前に移転。1970 年の年明けからこの地で講義が始まっています。私は 1971 年に当時の理工学部建設基礎工学科に入学しましたが、埼大生として 4 年間を過ごしたキャンパスはとても広々としており、木々も少なく、建物が並ぶだけの殺風景なものでした。それが今や四季折々に美しく緑豊かな、そして私の大好きなキャンパスになっています。

埼玉大学創立 70 周年のキャッチフレーズは「つなげよう未来へ」です。先程、教養学部の卒業生代表として学位記を受けた上村真由さんが作ってくれました。彼女が込めた思いは、「あらゆる立場の人同士をつなぐ『架け橋』であることが埼玉大学の魅力。例えば、留学生と日本人学生が、地域に密着した企業と大学生が、同窓生と現役埼大学生が、つながっています。このような、70 年間の人と人の心を『つなぐ』役割をこれからも続けてほしい、未来へ『つないで』ってほしい。」とのことです。

埼玉大学の発展と構内の木々の成長は、時の流れという時間軸の重みを教えてくれます。みなさんも埼玉大学において、それぞれに多様な学問、多様な人とつながり、自身の時間軸に沿って歩みを進め、大きく成長し、埼玉大学の歴史をつなぎました。みなさんには、このことに自信と誇りを持ち、これからも 86,000 人あまりの埼大同窓生の一人として埼玉大学とつながり、活躍してほしいと思います。

今日は平成最後の卒業式、埼玉大学の時間軸の一つの節目です。平成もあと 1 ヶ月あまりとなり、様々な人が平成を振り返っています。その一人、東京大学元総長の佐々木毅先生は「平成時代は内外とも『想定外』の出来事の連続のように見えてくる」（學士會会報、第 934 号、2019 年）と言い、真っ先に思い浮かぶものとして阪神淡路大震災に始まる一連の大地震、特に東日本大震災の規模の大きさと巨大津波、それに起因した深刻な未曾有の原発事故、ダメを押したものとして英国の EU 離脱とトランプ政権の誕生を挙げています。政治学者でもある佐々木先生は、かつてグローバル化の音頭取りであった米英両国が脱グローバル化の先頭に立つというのはまさしく「想定外」の事態だったとした上で、こう言います。「人間は想定に従って生きる動物ですが、想定をどうとるかには人間の側の問題です。思い込みといわゆる常識に寄り掛かることなく、想定を広くとって生きるべきことを平成の時代は我々に教えているように見えます。勿論、よい意味での『想定外』も含めて。」と。

私は、埼大生時代の恩師との出会いにより学問の面白さ、広がり、奥深さを実感したことを契機に、構造物の振動現象を専門として研究を進めてきました。そこで、平成の「想定外」の出来事として挙げられた大地震について、もう少しお話ししたいと思います。

実は、私が橋などの構造物の設計に絡んで「想定外」を最初に実感したのは地震ではなく、風。埼大卒業後に進学した東大大学院で目の当たりにした映像でした。1940年、風速わずか19 m/sの風で大きく振動して崩落してしまった、当時、世界第3位の長大吊橋、アメリカ・タコマ橋の映像です。それまでは、巨大な吊橋が風で振動して壊れるなど、誰も想像できず、まさに想定外の自然災害だったのです。タコマ橋の悲劇と呼ばれるこの災害を教訓として、風に対する橋の設計が進化し、日本でも世界最長の吊橋である明石海峡大橋が実現しました。

その明石海峡大橋が建設されているさなかの1995年、つまり皆さんが生まれる前の平成7年1月17日に兵庫県南部地震による阪神・淡路大震災が起きました。私も、地震発生から2ヶ月経った頃に、橋の被害状況調査を目的として被災地を訪れ、大きな衝撃を受けたのを昨日のここのように覚えています。兵庫県南部地震はマグニチュード7.3、最大震度7という巨大地震で、亡くなった方6,434人、全半壊した家屋512,882棟という甚大な被害をもたらす大惨事となったのです。橋の被害も凄まじいものであり、世界に冠たる耐震技術を誇っていた日本の「耐震工学神話」は脆くも崩れ去りました。私も含め、当時の橋の技術者達は「兵庫県南部地震は橋の設計で想定していたものをはるかに超えていた」と言う以外に被害を説明できませんでしたし、それが正直な対応だったと思っています。

それ以来、構造物の地震に対する設計法が改善され、設計で想定する地震動をより適切に設定するとともに、免震や制震などの考え方も積極的に取り入れられるようになりました。そして、既存の構造物についても耐震補強が施されるなど、ほとんどの橋が地震対策工事を終えていました。その時に東北地方太平洋沖地震が起こったのです。平成23年、つまり2011年3月11日のことです。幸いなことに、地震の直接的な作用による橋の被害はほとんどなく、阪神淡路大震災での教訓は活かされました。ただ、津波に起因した災害や原発事故は想像を絶するものでした。

東日本大震災のもたらした教訓は多岐に亘りますが、その一つに「レジリエントな社会づくり」の考え方があります。**resilience**とは精神的回復力などと訳される心理学用語であり、脆弱性の反対の概念です。辞典には「**the ability of people or things to feel better quickly after something unpleasant, such as shock, injury, etc.**」とあります。これを受け、「レジリエントな社会づくり」は柔軟性があり、自然災害や重大事故に強く、回復力のあるコミュニティを作っていくことを意味します。「想定外」という言葉を安易に使うべきではないものの、将来のことに何らかの「想定」をせざるを得ず、将来を確実に予測できないという意味で、「想定外」のことが起こることは「想定内」のことと言えます。したがって、防災という自然科学的なハード的対策による災害への備えだけでは、想定外のことが起きた場合に無力であり、これに加えて災害時の対応と災害後の復旧という人文社会科学的なソフト的対策を想定するのが、レジリエントな社会という新たな考え方です。歴史を振り返れば、人間は常に悲惨な災害や事故を教訓に前に進んで来ました。このレジリエンスという新たな考え方も、自然災害や重大事故をもたらした人間社会の未熟さを真摯に受け止め、硬直化しがちな人間の考え方をいかに柔軟にできるかということの重要性を教えてくれています。これは、先程の佐々木先生の言葉にもつながります。

ところで、このところの自然災害の多さはみなさんも実感していることと思います。この1年を振り返っても、大阪府北部地震、北海道胆振東部地震と、マグニチュードが6を超える大地震が続けて発生、大きな被害をもたらし、西日本豪雨では多くの地点で雨量が観測史上最大値を更新、221人の死者を出すなど、被害は過去の豪雨災害と比べて極めて大きなものでした。世界に目を転じて、スペイン、インド、中国などで豪雨や洪水による大規模災害が続きました。洪水による衛生状態の悪化が感染症をもたらし、多くの人が亡くなるといった問題は、多くの国や地域で日常的に発生しているのが現状です。

この状況も踏まえ、国連は2015年に持続可能な開発目標SDGs(Sustainable Development Goals)を掲げました。このSDGsは、誰一人取り残さない社会の実現、貧困、不平等・格差、気候変動のない持続可能な世界の実現を目指し、経済・社会・環境をめぐる広範な課題に統合的に取り組むため、世界全体が共に目指すべき17の目標です。地球規模課題への挑戦であり、日本が直面している社会的課題も包摂したものです。

日本では、SDGsに対応した府省・分野を超えた横断型の国家プログラムとして、「戦略的イノベーション創造プログラム」SIP(Cross-Ministerial Strategic Innovation Promotion Program)を創設、Society 5.0を提唱しています。自然災害についても、その激化と社会の脆弱化を踏まえて、「レジリエントな防災・減災機能の強化」が一課題として設定されました。このSociety 5.0は、ICTを活用しサイバー空間とフィジカル空間とを融合させて、人々に豊かさをもたらす「超スマート社会」を世界に先駆けて実現していくというもので、社会的課題に対応したシステム開発を行うとともに、共通のプラットフォームの構築を進めています。

これを受け、経団連は2016年、提言「新たな経済社会の実現に向けて～『Society 5.0』の深化による経済社会の革新」を発表し、経済社会の革新には5つの壁の突破、つまり省庁、法制度、技術、人材、社会受容に関わる壁の突破が不可欠であるとしています。その中で、みなさんに知っておいてほしいことは「社会受容の壁」の突破です。いくら技術革新が進んでも社会との融合が生じなければ何もならず、社会的コンセンサスの形成、倫理的課題や社会的影響などの検討が必要です。その解決には、理工系の知見のみでは不十分であり、文系の知見を含める形で、産学官により包括的な研究を行うことが必要とされているのです。

この文系・理系の学問について言えば、みなさんが入学した2015年に、文部科学省の通知が巻き起こした「国立大学に文系学部はいらない」といった騒動を覚えているでしょうか？この問題で良く引き合いに出されるのが吉見俊哉東大教授の著書『文系学部廃止』の衝撃(集英社新書、2016年2月)です。そこでは、「儲かる理系」「儲からない文系」という構図の常識化こそが、騒動の背後にある根本的な問題とされています。そして、「役に立つ」には目的遂行型と価値創造型があり、目的遂行型はどちらかというと理系的な知で、文系は苦手、価値創造型は「役に立つ」と社会が考える価値軸そのものを再考したり、新たに創造したりする実践で、文系が「役に立つ」のはこの意味においてであることが多いと指摘しています。まさに、経団連の言う「社会受容の壁」の突破における文系知の不可欠さです。

吉見教授は、教養教育と専門教育にも触れ、「深い」専門教育と「広い」教養教育は、文系理系の双方にあるもので、実際の学問知の広がりには二つの軸と四つの象限から成っているとしています。その上で、近年の大学教育として焦点化されるのは、知の中身よりも活用能力や処理技能であって、より実践的な学びを指向していること、その分、核となるべき「教養」

の内実が空洞化しているという懸念も生じていることを指摘しています。つまり、表現力、コミュニケーション力、課題解決力など、実に様々なコンピテンスに関心が向けられているが、大学が育んできた知識そのものへの関心は衰退しているように見えるとのこと。

AI 等による社会変革が激しく急な不確実社会にあって、教養の重要性が改めて指摘されることが多くなっています。その中でも臨床哲学を提唱する哲学者、鷺田清一先生が、ゴリラの研究で有名な人類学者、山極寿一先生との対談（「都市と野生の思考」、インターナショナル新書 013、集英社、2017 年）で語っている「科学者の教養」がとても示唆に富んでいますので紹介しましょう。まず、臨床哲学の一例を「残っている食材で何をつくるか考え、食事の用意をしながら洗い物をしたり、子供の面倒もみたりといった家事の感覚」とした上で次のように述べています。「まわりに目配り、気配りしながら、あり合わせのものをうまく使って、全体や他者への心遣いをする。そういう知が今求められている。学問が細分化されたため、知をすべて司るような人がいなくなり、このことが福島原発事故を大きくしたのではないかと。自分が身につけたスキルを専門外のテーマにも応用して考えることが、これからの科学者のあるべき姿ではないか。」そして、科学者は専門性を究めようと自分のテーマをどんどん掘り下げ、その間は他のことに目を向ける余裕などないという状況を憂い、こう続けます。「今、求められるのは上下方向ではなく、水平方向に気を配る知。例えば、原子力の問題を家事的発想に基づき考えるなら、予算はもとより、現状と将来のリスクから後始末まで見通す必要がある。これらを全方位的に水平方向に気配りできるのが、科学者の教養である。」と。

データ社会や AI とどのように向き合うかを考える際に、データから価値を見出し、考え、役に立つ情報を作り出すのは AI ではなく人間であること、AI の判断に対して最終的には人間の思考が重要であることが指摘されます。結局、水平全方位方向に気を配るには、常に人間らしく「考える」こと、考え続けることが重要です。また、私たちは「問う」ことではじめて「考える」ことを開始する、つまり思考は疑問によって動き出すとされ、考えるためには、問い続けること、そして好奇心が意味を持ちます。Albert Einstein の名言のとおり、「The important thing is not to stop questioning; curiosity has its own reason for existing. Never lose a holy curiosity.」

今日の卒業式では、来賓として、新たに埼玉大学同窓会長になられた棚木誠様をお招きし、みなさんに向けメッセージを頂きます。みなさんにあっても是非、同窓生として埼玉大学に対する愛着を持ち続けて下さい。そして最後に、みなさんがこれからも多様な人々と出会い、つながり、様々なことに触発され、問い続け、考え続け、かつ幸運にも恵まれてさらに成長し、それぞれに充実した人生を送られることを祈念して、私の式辞とします。

平成 31 年 3 月 26 日

埼玉大学長 山口宏樹